モニタリングの質を変える「観察の技術」

変化を見逃さない視点の統一と、支援につながる記録の仕組み



障害福祉サービス（就労継続支援B型）実務ガイド

NotebookLM

モニタリングは「問題報告書」になっていませんか？



日々の業務に忙殺され、記録が「起きた出来事の羅列」や「トラブル処理の報告」になってしまう。
しかし、本来のモニタリングとは「変化を見つける仕事」です。
良い変化や、トラブルの手前にある「小さなサイン」を見落としていませんか？

変化を「偶然」気づくのではなく、「仕組み」として捉える体制が必要です。

NotebookLM

支援が変わらない原因は、記録量ではなく「視点のズレ」

担当者ごとに「見る場所」が違うと、
次の支援が決まらない



- 視点がバラバラ（主観的）
- 記録が「感想」になる（例：「元気がない」）
- 具体的な対策が打てない

見たもの：遅刻した事実	見たもの：ミスの回数	見たもの：対人トラブル
見落とし：前夜の睡眠不足	見落とし：作業切替時の混乱	見落とし：声量や表情の変化（予兆）

NotebookLM

解決の鍵は「視点・記録・判断」の標準化

経験則や個人のセンスに頼らず、チーム全体で「見る・書く・決める」ルールを統一します。



1. 観察 (Observation)

どこを見るか？
→「場面」を固定する



2. 記録 (Recording)

どう書くか？
→「事実と仮説」で書く



3. 会議 (Decision Making)

どう決めるか？
→「ネクストアクション」を決める

NotebookLM

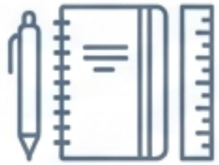
Step 1：観察項目の設計（場面固定）

3つの定点観測で、利用者の「変化」が浮き彫りになる



1. 通所前後

- 遅刻
- 表情の明るさ
- 体調の訴え



2. 作業中

- 集中の持続時間
- ミスの傾向
- 休憩の取り方



3. 対人場面

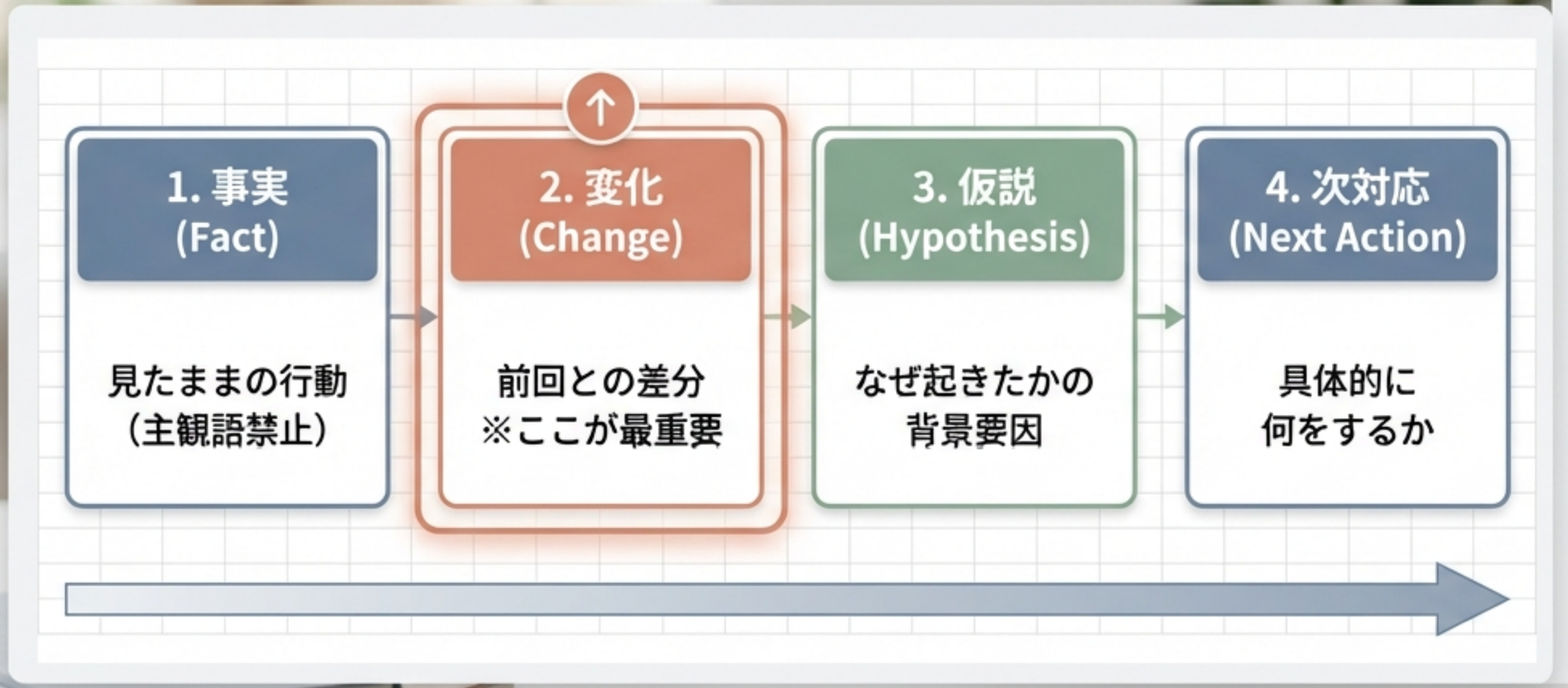
- 依頼の仕方
- 断り方
- 相談
- 衝突の予兆

この3場面を固定することで、経験年数が異なるスタッフ間でも観察の粒度が揃います。

NotebookLM

Step 2：記録ルールの統一（4要素フォーマット）

主観を排し、「次の支援」を生むための記録構成



Writing Tip:

「何時に」「どこで」「何をしたか」を先に書く習慣をつけると、主観語は自然に減ります。

NotebookLM

【実例】良い記録・悪い記録の比較

Bad Example / 悪い例

「午後は集中できず、席を離れた。」

問題点：情報不足。なぜ離れたか、どう対応すべきかが不明。

Good Example / 良い例

【事実】14:10に作業中断。
【変化】先週より中断が1回増加。
【仮説】食後の眠気と課題難度によるものか。
【次対応】午後は工程を2分割し5分チェックインを実施する。

「感想」ではなく「構造」で書くことで、次の手が打てるようになります。

NotebookLM

Step 3：会議の短縮と意思決定

「報告」で終わらせず、「アクション」を決める場にする



Meeting Hack:
10〜15分の
ミニ会議

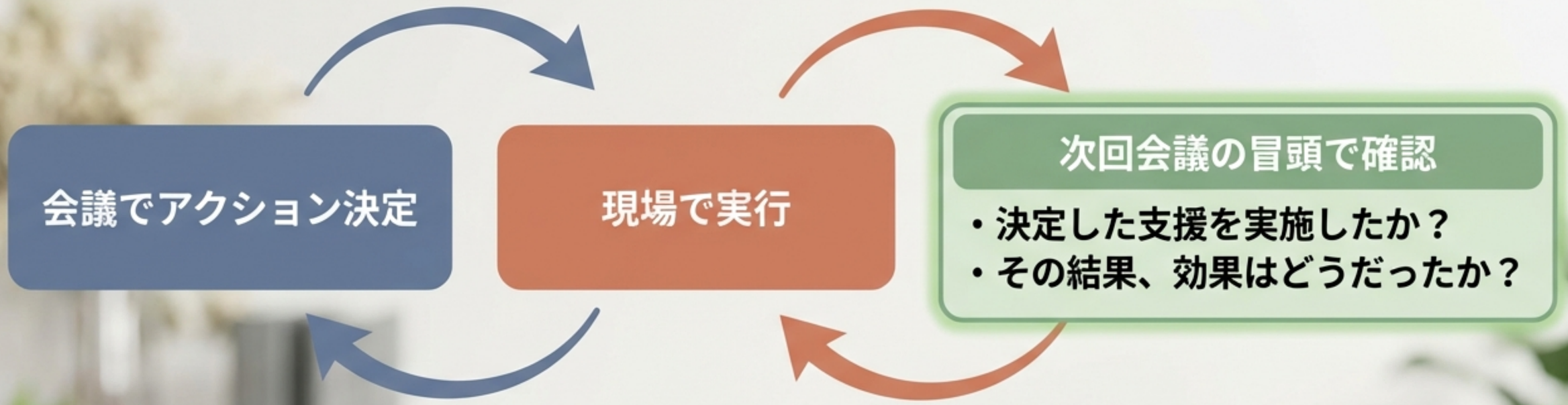
1. 維持したい行動は何か？
   （Good News）
2. 兆候（サイン）が出た行動は？
   （Bad/Warning News）
3. 明日から変える支援
   (1アクション）は何か？

結論が出ない議論を禁止し、必ず「明日やること」を決めて解散します。

NotebookLM

Step 4：支援変更の追跡（PDCA）

「やりっぱなし」を防ぎ、改善のサイクルを回す



追跡がないと、会議は「決めたつもり」で終わり、
支援の質は向上しません。

NotebookLM

導入事例：A事業所の変化

↓ Before



記録量は多いが、会議で結論が出ず、支援が属人化していた。

↑ Action



観察項目を3場面で統一し、日誌に「差分」欄を追加。ミニ会議で1アクション決定を義務化。

✓ After



- 体調悪化の予兆を早期に発見できるケースが増加。
- 支援調整のスピードが向上。
- 利用者本人へのフィードバックが具体化。

成功要因: 記録の目的を「報告」から「支援改善」へシフトしたこと。

NotebookLM

よくある失敗と回避策

罠	回避策
罠：書きすぎ（Burnout）	
詳細を書こうとして継続できなくなる。	必須項目を絞り、まずは継続を優先する。
罠: 良い変化の無視（Negative Bias）	
問題点ばかり記録してしまう。	「小さな前進」も記録し、本人の意欲向上につなげる。
罠：決めない会議（Indecision）	
「共有して終わり」になってしまう。	どんなに小さくても「次の行動」を1つ決めるルールを徹底する。

NotebookLM

品質の「見える化」と評価指標（KPI）

品質の「見える化」

- ☑ 観察項目が場面別に定義されているか？
- ☑ 主観語ではなく行動事実で記録されているか？
- ☑ 会議で次アクションが決まっているか？

90%以上	95%以上	前月比増加
記録標準化率 （統一フォーマット使用率）	支援調整実施率 （決定事項の実行率）	兆候早期検知件数

NotebookLM

法的根拠・ガイドラインへの適合



本手法は、以下の制度要請に応える確かな運用基盤を作ります。

- ・障害者総合支援法：モニタリングの実施義務
- ・指定障害福祉サービス運営基準：サービスの質の確保
- ・個別支援計画：計画の見直し（モニタリング結果の反映）

適切な記録と会議録は、実地指導・監査における信頼性の証となります。

NotebookLM

まとめ：観察が変われば、支援が変わる

1

1. 観察項目を揃える（場面固定）

指定的観察ポインで、固定な場面に特殊的観察点ぇを定義ることが固定をすることで、憲勤禮るの大くことがあります。

2

2. 記録を行動ベースで残す（事実・差分・仮説・次対応）

→ 事実（ありのまま）
→ 差分（前回との比較）
→ 仮説（なぜ？）
→ 次対応（何をするか）

3

3. 会議で次アクションまで決める（PDCA）



Plan（計画）→ Do（実行）
→ Check（評価）→ Action（改善）

モニタリングは「記録」のためではなく、「利用者の生活」を良くするためにあります。
まずは「観察項目の固定」から始めてみましょう。

NotebookLM